

不合理な信念はいかにして説明されるか？ —心の分割と *Motivated Irrationality*—

太田雅子

Abstract

We often have irrational beliefs which are not coherent with the others. If they could be explained under “The Principle of Charity”, they would no longer be regarded as irrational. How can we explain irrational beliefs as such and give their place in the system of our beliefs? Donald Davidson proposed “the partitioning of mind” as the answer to this question, but his solution is hopeless because it seems to be inconsistent with holism. I propose the idea of *Motivated Irrationality* as an explanatory strategy of irrationality, because I think it can explain irrationality more simply than the mental partitioning and give the way out of the paradox of irrationality.

我々はしばしば手持ちの信念とは符合しないような不合理な信念を持つことがある。タバコが人体に及ぼす悪影響についての知識が十分ありながら、タバコを吸うのはよいことだと思ったり、熱があり、頭が痛いなどの数々の兆候があるにもかかわらず自分は病気ではないと思ひこむのはよくあることである。他方、我々は他人が持つ諸々の信念が、ある程度整合的でつじつまの合った体系をなしていると思ひなした上で、相手の心情を押し量り、コミュニケーションを行う。ほぼ矛盾を許さない体系的なものであるように思われる我々の信念において、これらの不合理な信念が生じた場合、その不合理性はどう説明され、信念体系に位置づけられるのか。この問いの答えとして、D・デイヴィッドソンは、「心の分割」なる案を提示している。本稿では、デイヴィッドソンのこの奇抜に見える方策が不合理な信念の説明をめぐる困難を救

うには不十分であることを示すとともに、それならばどのようにして不合理な信念を不合理なものとして我々の心に位置づけることができるのかを探る。

1.

まず、どのような信念を持つ場合にそれが「不合理」と見なされるのかを明確にしておく必要がある。今回扱うのは、ある信念とその他多くの信念の間に「内的不整合」が生じているというタイプの不合理性である。「タバコを吸うのがよいことだ」と信じている人を例にとると、もしその人がタバコが人体に及ぼす悪影響についての様々な信念を全く持っておらず、「タバコは神経を鎮静させ集中力を高める」「タバコはストレス解消に役立つ」など、喫煙に有利な信念のみを持ち、その総体をもとにして「タバコを吸うのがよいことだ」という信念を形成しているなら、その信念が我々にとって納得のゆかないものであっても、彼にとっては合理的なのであると認めざるを得ないだろう。問題となるのは、喫煙の悪影響についての信念を持ちながらなお「タバコを吸うのがよいことだ」と信じている場合である。彼が喫煙について通常持ち合わせている諸々の信念からはとうてい共存しえないような信念が現れたとき、その信念は、第三者のみならずその信念を持つ当の本人にとっても「不合理」だと見なされるだろう。

不合理な信念をめぐる困難は、信念の「解釈」の側面においてより明確になる。この困難が顕著になる典型的な例が、「不合理性のパラドクス」をめぐるデイヴィドソンの一連の考察である。以下では、不合理性がいかなるパラドクスを生じさせるのかを具体的に見てゆこう。

周知のとおり、デイヴィドソンは、信念の解釈の際には「寛容の原則 (The Principle of Charity)」が重要な役割を果たすことを強調する。この原則はもともと、未知の言語の話者の発言を真となるよう解釈せよという要請を意味するものであったが、心的状態の解釈に適用される場合には、「相手の信念がなるべく真であり、なおかつ合理的となるようにせよ」という意味となる。そしてこの原則の支えとなっているのは、ひとつの信念はその他多くの信念をもとに形成され、ある信念の変化はそれを支える多くの信念に影響を及ぼすという、いわゆる「全体論 (holism)」の立場である。全体論によれば、信念の内容もまた、他の信念とどういう論理的関係を持っているかによって決まる。「歩行者用信号に青色がともれば横断してもよい」と信じているならば、それと両立する「歩行者用信号には赤と青の2色ある」や「赤信号では歩行者はわたってはならない」などの信念をも同時に持っていると思なされる。

全体論および寛容の原則のもとで、不合理な信念がどのように解釈されるのかを見てみよう。あるドライブインでの雑談で「飲酒運転をしたっていいじゃないか」と言い出した運転手がいたとする。彼に対しなぜそう思うのか尋ねると、「自分は酒が好きだからいつでも飲んでいたいし、どうしてそれを運転の時だけ我慢しなきゃならないのか納得がゆかない」と答える。ここで寛容の原則を適用し、「飲酒運転をしたっていいじゃないか」という信念が理解可能であるように解釈するならば、彼にはこの他に「酒を飲んで運転すると気分がよい」「酒が飲めさえすれば事故を起こしても構わない」などの信念をも同時に帰属させることができるように思われる。しかし彼に、「運転しているときに酒を飲むとどのようなことが起きるか」と尋ねれば、「まっすぐに車を動かさなくなり、事故を起こしやすくなる」と答え、「人をひき殺してもよいと思うか」という問いには「それはいけないことだと思う」と答えたとする。これらの発言は、もし文字通りに受け取られるならば、「飲酒運転をしたってよい」という信念に寛容の原則を適用して帰属されるはずの、飲酒運転の危険性やそれによって起こる事故の深刻さを軽視する信念と符合しない。

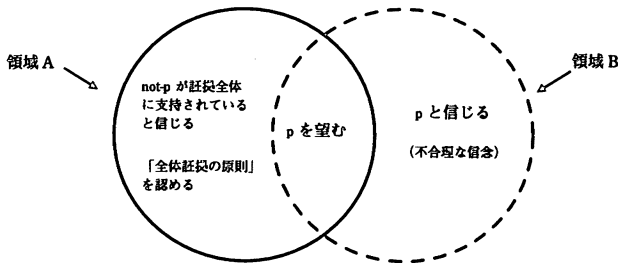
つまり、全体論を受け入れ、寛容の原則を用いて不合理な信念を他者に帰属する際には、我々は次のようなディレンマに直面する。不合理な信念を惹き起こした心的原因に寛容の原則を適用し、その信念と整合するような内容を帰属させるならば、その信念は内的不整合とはならないので、不合理ではなくなってしまう。他方、もし寛容の原則を適用しないならば、信念の内容を捉えるのが困難になる。信念をはじめとする心的状態は、その他の心的状態との論理的関係をもとに内容を与えられるが、内的不整合として不合理な信念が許容されるならば、その関係はくずれてしまうからである (Davidson [1982], p. 299)。先の例でいうならば、「飲酒運転は許される」という信念を合理化するような種々の整合的な信念を運転手に帰属させ、「彼が飲酒運転は許されると信じるのはXと信じているからだ」と説明するならば、飲酒運転についての彼の信念は「X」という信念によって合理化され、不合理とは見なされない。しかし、寛容の原則を適用せずに、「飲酒運転は許される」という信念と、それと整合しないその他の信念を同時に帰属させるならば、我々は彼が飲酒運転について何を信じているのが理解不可能になるだろう。

このような診断を下した上で、デイヴィッドソンはこの問題を二段構えで解決しようとする。第一段階は、不合理な信念は「理由にはならない原因によって惹き起こされている」とすることである (Davidson [1982], p. 298, [1998], p. 7)。デイヴィッドソンの立場において、行為および信念の理由はその原因であるとされているが、不合理な行為や信念の理由は、必ずしもそれらを惹き

起こしたものであるわけではない。「喫煙は良いことだ」と信じる原因となるのは「タバコを吸いたい」という欲求であり、この欲求はあくまで我々が通常持っている整合的な信念体系から出てくるものである。だが、この欲求は「喫煙はよいことだ」という信念を惹き起こしはしても、「なぜ喫煙がよいことなのか」を説明することはない。先ほどのドライバーの例にしても、いつでも酒を飲んでいたいという欲求は飲酒運転を許容する信念を惹き起こしこそすれ、それを合理的なものとはしていない。これらの事例は、信念がその原因によっては説明できない事例であると見なすことができる。

しかし、ひとたびこのような形で不合理な信念の存在を認めるならば、ある特定の事柄に関して、ひとりの人間の心の中に合理的な信念と同時に不合理な信念が存在することになり、信念の全体論的整合性が損なわれるように思われる。だが、両者を調和させる必要はないとするのが第二段階、すなわち「心の分割」である (Davidson [1982], pp. 300ff., [1985], p. 147, [1998], p. 8)。原因となる心的状態は、その他多くの合理的信念を含む領域の中にあるが、そこから惹き起こされた不合理な信念は別の領域に属し、因果的には関連し合うが合理化のレベルでは関わり合わずに共存しうる。その際、これらの領域は重複する。この重複部分には我々の持つ信念や欲求の多くが含まれると考えられ、とりわけ自己欺瞞のように、合理的な信念を持ったことがきっかけで（当の合理的信念を受け入れたくないがために）不合理な信念を持つようになるとき、両者の因果的なつながりを担っていると思われる。デイヴィドソン自身は分割のしくみを明示していないが、そのかわりに J・ヘイルによる下図 (Heil [1989], p. 578) が参考となるだろう。

【図 1】



p を不合理な信念内容とする。領域 A と領域 B に属する諸々の信念は、それぞれの円内において整合的であり、また、同一円内の信念同士は因果関係

を持つことができる。[図1] がもし適切ならば、「pを望む」という欲求をpという信念の原因であると同時に理由であるとしてもよさそうだが、デイヴィドソンはそうは考えない。ヘイルが想定するところでは、この状況は次のように説明される。デイヴィドソンは、不合理な物事を信じる事例を、意志薄弱な行為をする場合と類比的に捉えている。意志薄弱な人が、あらゆる点を考慮した上で最善とされるのとは異なる行為をしてしまうのと同様に、不合理な信念を持つ人は、「手持ちのあらゆる妥当な証拠によってもっとも支持されている仮説を信じるべきだ」という原則（全体証拠の原則 The Principle of Total Evidence）¹に背いている。pを信じるのが不合理なのは、この信念がpへの欲求のみによって惹き起こされているからではなく、その信念を惹き起こす際に、この欲求が「not-pが証拠全体に支持されていることを信じる」という判断と全体証拠の原則の受容とを伴うからである。ところが、これらの判断や原則の受容は、pへの欲求とは相容れないものであるから、領域A内でも点線で仕切られた部分の外に属するとはしか考えようがない。よって、pという信念と、その信念に反する判断は、pへの欲求を介して別々の領域に属するようになるのである（Heil [1989], p. 578）。

2.

不合理な信念は理由ではない原因によって惹き起こされるものであり、合理的な信念とは別の領域に存在するという見解は、「不合理な信念をいかにして不合理なものとして説明するか」という問題の解決に何らかの進捗をもたらしたであろうか。少し考えただけでも、問題解決に成功したか否かには疑問の余地がある。まず、合理性において相反する信念の属する領域が別でも、領域内での整合性が保たれているならば、このことは、不合理な信念でもしかるべき領域においては内的不整合をきたすことなく合理的となりうることを意味する。それならば、不合理な信念が合理化されるという一見自己矛盾的な状況は依然として解消されずに残るのではないか。更に、S・ゴッツアーノは、心の分割は新たなディレンマを生むと指摘する。一般に、不合理性は信念間に形成される一定のパターンに照らし合わせて判断されると考えられるが、相互に食い違う信念をそれぞれ支持する領域があるならば、我々が持ちうるあらゆる不合理な信念ごとに適用可能なパターンがあることになり、認識論的分裂（epistemic schizophrenia）を招く。だからといって、いずれかの領域全体が不合理であるとするならば、信念間の全体論的關係は保持できない（Gozzano [1999], p. 195）²。ゴッツアーノの指摘が適切ならば、不合理性のパラドクスをめぐる状況はさほど変わらないように見える。

注意すべきなのは、不合理性がある種の合理性を背景に特定される以上、その説明は、他の信念の合理性を損なうものであってはならないという点にある。このことは、信念の全体論的整合性を可能にする寛容の原則はとりあえず保持しておいたほうが賢明であるという見方につながる。ゴッツアーノは、全体論や寛容の原則を保持しながらも、心を分割せずにすむような改善案を提出している。それは、不合理性をを同一個人の心の分割としてでなく、不合理な信念を持つ個人と、寛容の原則に従って構成された理想の「心のモデル」との分離として理解する考え方である。寛容の原則を援用して他者の信念を解釈する際、我々はこのように信じるならそのように信じるだろうという一定のパターンを相手に当てはめている。そのパターンと実際の信念帰属の間に何らかの違いが生じるならば、その相違点こそが不合理とされるのである。先ほどの飲酒運転を肯定する運転手にこの考え方を適用すると、「飲酒運転をしたっていい」という彼の信念が不合理とされるのは、理想的な心のモデルならば、事故の危険性や人命の尊さに関する手持ちの信念から「ゆえに飲酒運転は許される」という結論を引き出すとは考えられないから、という理由による。このとき、飲酒運転を肯定する信念体系と、飲酒運転は危ないとする信念体系とが当の運転手自身の内部で分かれて存在すると考える必要はない。

ゴッツアーノの提案とデイヴィドソンの立場との相違点は、不合理な信念を持つ人間の心が分割されている否かのみである。この立場は、不合理な信念と他の合理的な信念との間に境界を設けないので、どのような信念が不合理とされるのかの基準が曖昧になったり、心の特定の領域のみに合理性が帰されるといった、心の分割に伴う種々の不都合に見舞われることはない。けれども、たとえその点で改善が見られたとしても、ゴッツアーノ自身も指摘している重要な問題が残っている。それは、信念の解釈者にとっては不合理であるが、信念の持ち主にとっては依然として合理的であるような事例にどう対処するか、という問題である。ある信念が理想的な心のモデルの一部と異なるかどうかは、あくまで第三者の観点から判断される³。ゆえに、もし第三者の解釈に表れない信念者の心の奥底で、理想的なモデルと一致する信念が見出される可能性があるならば、不合理性を心の理想的なモデルとの比較によって説明しても無駄ということになってしまう。

ゴッツアーノが自らの立場の反例として挙げているのは、宝くじの当たる確率が少ないことを示す多くの証拠があるにもかかわらず、自分が買ったこのくじは絶対に当たると信じている人である。彼は一見不合理な信念を持っているように見えるが、「心の奥底では」本当はそう信じていないので不合理

であるとは言えないのではないか。この疑問に対してゴッツアーノは次のように答える。確かに、寛容の原則は、あくまで解釈者に観察できる限りでの行為に適用可能なものであり、観察できない「心の奥底」までは及ぶことができない。けれども、不合理な信念を持つ人の心の奥に、それに反する合理的な信念が潜んでいようがまいが、実際に不合理な信念を持っている証拠となるような言動や行為を彼がしているのであれば、彼は間違いなくその信念を持っているとしてよく、合理性をはかるにあたって行為に現れない信念を付度する必要はない (Gozzano [1999], p. 147)。

しかし、それだけでは「他人から見れば不合理であっても本人にとっては合理的」という事例に十分に対処することはできないだろう。寛容の原則の要点は、あくまで我々の推論規則に即して解釈を行うことにある。もし絶対当たると信じて宝くじを買った人が、それに反するように見えるあらゆる証拠から、それでも「このくじは絶対に当たる」という結論を導くような、我々と異なる推論規則にのっとしてこの信念を持っているとしたら、もはや寛容の原則に則して彼を不合理とする方策は尽きてしまうのではないか。ゴッツアーノによる不合理性の説明は、寛容の原則に基づく信念解釈においては、おのずと限界に突き当たるように思われる。

3.

デイヴィッドソンやゴッツアーノによる不合理性の説明が抱える困難の源は、寛容の原則にあると考えられそうである。しかし、だからといって、寛容の法則を放棄することで困難が解消されるわけでもないだろう。先にも述べたように、不合理性はある程度の合理性を前提にして初めて意味を持つのであり、寛容の原則は、我々の信念のおおよその整合性および合理性を保証する働きをするからである。不合理性の説明において寛容の原則をどう扱うべきかは依然として重要問題ではあるが、本稿の目的は、寛容の法則の是非を問うことではなく、信念の不合理性をパラドクスに陥ることなく説明する方法を探ることにある。よって、この問題に関する考察は別の機会に譲ることとし、本章以降では、寛容の原則から離れて別の方法を模索したいと思う。その方法とは、信念の「理由」と「原因」との関わりを見直すというものである。これは1章で言及したデイヴィッドソンの解決の第一段階の修正を図るものであるが、ひいては第二段階の「心の分割」の否定にもつながることになるだろう。

ヘイルは、信念の「理由ではない原因」について、デイヴィッドソンとは異なる見方を提案している。彼は、デイヴィッドソンが「理由」という概念を、証

拠に基づいたものに限定していることに注目する。デイヴィドソンにとっては、証拠に基づいた信念でなければ他の信念の理由にはなりえない。例えば、我が子が犯罪を犯していることを裏付ける十分な証拠があってもなお無実を信じ続ける親の信念は、無実であってほしいという彼らの欲求によって惹き起こされるが、その欲求は手持ちのあらゆる証拠に反しているがゆえに理由にはならない (Heil [1989], p. 580)。しかしヘイルによれば、信念の不合理性を決定づけるのは、それが証拠に基づいた理由によって信じられているか否かではない。我が子の無実についての信念が、無実であってほしいという欲求を原因として生じていると考える点では、デイヴィドソンとヘイルの間に違いはない。だが、デイヴィドソンが無実についての信念を証拠に基づいた形で合理化しないがゆえにこの欲求を理由と見なさないのに対し、ヘイルは証拠による支持を得ていない欲求も理由になりうると考える。なぜなら、その欲求はプラクティカルな動機（「そのように信じた方が安心感を得られる」「耐えがたい現実から目をそらすことができる」など）をもとに生じており、さらにそれらの動機は、有力な証拠から目を背けさせる力を信念者に与えるからである。彼らの信念は確かに不合理であるが、それは、デイヴィドソンが考えるように、なぜその信念を持つのかの理由が証拠と相容れないからではなく、たとえ証拠とは無関係であっても、プラクティカルな動機によって与えられる理由ゆえにそれを信じているからである (Heil [1989], p. 580)。そもそも心を分割させるという発想が生まれたのは、不合理な信念が必ずしもその原因によって合理化されるとは限らないからであった。しかしながら、証拠に反するしかたで形成された欲求や他の信念が理由になりうるならば、その理由はあくまで合理的な信念を導き出すであろう場合と同じ信念体系に属しながら不合理な信念を説明できるので、心を分割させる必要はなくなるのである。

また、ヘイルと同様の立場を支持する A・ミールは、「理由ではない原因」の存在についてはデイヴィドソンに理解を示してはいるものの、それによって惹き起こされた信念や行為が必ずしも不合理であるとはいえないと指摘している。例えば、飛行機に対する恐怖を克服するために、「自分は（ごく近所に住む）友達のところへ行くのだ」という自己暗示をかけ、見事に克服に成功したとする。友達を訪問することは飛行機の恐怖の克服とは何の関わりもないが、実際にはその連想が恐怖の克服の原因になっている。そして、この連想は理由ではない原因によるにもかかわらず、飛行機の恐怖の克服を合理的に説明できる (Mele [1987], pp. 77-8)。このような事例において、友達を訪問するのだという自己暗示を飛行機への恐怖とは別の心の領域に置くこ

とで、恐怖の克服をより適切に説明できるようになるわけではない。確かに、自己暗示をかけようとするのが飛行機を怖がる自分とは別の「もう一人の自分」であるかのように説明することは可能である。だが、「もう一人の自分」による説明はあくまでも喩えとして有効であるにすぎず、せいぜいひとつの現象を別の観点から捉えた程度の効果しかもたらさない。そのような喩えを援用せずとも恐怖の克服を説明できるならば、わざわざ人格を分ける（心を分割させる）必要もないだろう。このことから見ても、理由でない原因の存在は心を分割させる根拠としては不十分であることがわかる。

ヘイルやミールは、行為や信念を形成する動機に重要な役割を与える不合理性の捉え方を提案する。この立場は「動機づけられた不合理性 (*Motivated Irrationality*, 以下 *MI*)」と呼ばれる。この種の不合理性の特徴は、あらゆる証拠や条件を考え合わせた上で最良の判断に基づいた行為や信念の動機よりも、それとは反する動機の方が強いために生じるという点にある。たいていの不合理性はある特定の動機から発する欲求や感情に起因すると考える *MI* の方策に比べて、不合理な信念は原因ではあるが理由にはならない心的状態によって惹き起こされるとして、それを含む心の領域をそれ以外の信念からなる領域から区別しようとするデイヴィッドソンの方策にそれほど効力があるとは思われない。ある欲求や意図、信念などによって惹き起こされた（他の）信念がなぜ不合理であるかは、それらの心的状態が当の信念の理由にならないからではなく、それが手持ちの証拠全体を考慮したうえでの最良の判断に反しているからだとして、心の分割を導入せずとも端的に説明できるからだ。

不合理な信念の原因となる欲求や意図などの心的状態は、その背後に発端となる動機づけの存在を示せれば、その信念の理由になりうる。しかし、その場合、理由を与えた時点で不合理な信念が不合理でなくなるという「不合理性のパラドクス」はどうなるのか。それは、ある信念が合理化されるか否かを、その信念自体が合理的であるか否かとは別に考えることで解決できる。いくらある信念が合理化されたとしても、それは手持ちの証拠に支持されていないという点で不合理であることに変わりはなく、たとえ理由を与え説明に成功したとしても、その信念の不合理性が消えるわけではないのである。

MI はデイヴィッドソンの立場よりも不合理性の説明を円滑にするのみならず、全体論になじみやすいという利点があることも特記しておくべきだろう。動機づけを伴う理由は、なぜある信念を持つのかだけでなく、なぜその信念が不合理なのかを説明する役割を担っている点で、不合理性の説明を可能にする。「コロンブスの野望が、彼に新大陸を発見したと信じ込ませた」というような希望的観測 (*wishful thinking*) の例 (Davidson [1998], pp. 3-4) を

考えてみよう。これにデイヴィドソンの見方を当てはめるならば、コロンブスの野望は彼の誤った信念の原因にはなっているが、それが正しい信念であるための理由にはなっていない、ということになるだろう。たしかにこの文だけを見れば、コロンブスの野望が理由になっていると見なすのはむずかしいかもしれない。けれども、例えば「強い願望は、その対象となる事態が真であってほしいという信念を生じさせる」「欲求に支配された信念は誤ることがある」など、信念の動機づけに関わる前提を付け加えることにより、コロンブスの野望は彼の誤った思いこみの理由となることが可能である。信念のプラクティカルな動機づけに関する諸々の補助的前提が有意味となるためには、ある欲求や感情を持つことによってどのような信念が生じるか、またそれらによって信念がどのような方向に歪曲されるかについてある程度の体系性を仮定する必要がある。この点はまさに、ある信念の真偽がそれに関わる他の信念全体の真偽に左右されるとする全体論の趣旨と符合すると思われる。ある信念や行為が不合理であるか否かは、何らかの合理性を背景にしなければ判断できない。信念や行為に不合理性を帰属させた場合、何が合理的となるのか不可解になる、というのがデイヴィドソンの指摘した「不合理性のパラドクス」の一部であった。MIでは、不合理性はその動機づけが合理的な信念および行為の動機づけよりも強かったために生じるが、いずれの動機を優先するかの比較考量は、整合的な価値判断体系のもとで行われるため、たとえある信念に不合理性が帰属されても、そのことによりそれ以外の信念の合理性が脅かされることはないのである。

4.

MIは、確かにデイヴィドソンの「心の分割」説よりは効率的に不合理な信念を説明でき、不合理性のパラドクスを回避する見込みを与える。とはいえ、MIも必ずしも十全であるわけではない。本章では、MIに予想される問題点のうち最も重要と思われるものをとりあげ、MIの持つべき構造をもう少し掘り下げてみたい。

MIの説明図式に予想される難点は、不合理な信念の原因と動機の関係にある。先ほどの我が子の無実を信じる親の信念の例に若干の応用を加えてこの点を考えてみよう。この親が、我が子が小さい頃は誰にでも優しく正義感が強かったことを証拠に「あの子が犯罪者ではないと信じたい」と望み、この欲求によって、我が子は無実だという信念が惹き起こされるとする。だが、この証拠は彼または彼女が容疑者である数々の証拠に比べればはるかに弱い。小さい頃に人に優しく正義感が強くても、それが大人になるまで持続する保

証はないからである。数々の物証よりも自らの証拠が脆弱であることを知りながら、親にあえてそちらの証拠を重視させるのは「受け入れがたい現実から目を背けないと生きてゆけない」というような動機である。このように描写すると、動機がどの信念を受け入れるかの欲求を惹き起こし、それが更に信念を惹き起こすように思われ、動機によって信念が因果的に説明されるように思われる。しかし、動機は不合理な信念を合理化する役割を果たさない。「我が子の無実を信じるのは、そう信じたほうが苦痛を免れられるからである」というのは明らかに説明になっていないように見える。動機による説明は、上の描像が正しいなら、せいぜい動機という「原因による説明」であり、「理由による説明」ではない。そうするとMIの説明図式は、不合理性が理由でない原因によって説明されるというデイヴィドソンの立場と結局は同じところに帰着するのではないか⁵。

しかしこの指摘には、MIにおける理由と動機の間を明確化することにより対処できる。動機がある信念を持ちたいという欲求を惹き起こし、その欲求が更に当の信念を惹き起こすという描像は正確ではない。確かに、動機が因果的働きをすることはあるが、それは、原因となる欲求を惹き起こすというよりも、むしろ信念者にとって受け入れがたい信念を支持する証拠から目を背けさせる役割を担うという意味においてなのである。動機はそれ自体が不合理な信念の理由となるのではなく、その信念の原因を理由たらしめるための背景を与える役割を果たす。先の例で言えば、「耐えがたい現実から目を背けないと生きてゆけない」という動機は、それ自体が我が子の無実についての信念を直接的に惹き起こしたり説明することはないものの、「我が子の無実を信じたい」という欲求が我が子の無実を信じる理由となるための背景条件を提供しているという意味で、間接的にその信念の発生に関与すると考えるのが適切であろう。

結論

不合理な信念をパラドクスに陥ることなく説明する方法として、デイヴィドソンは心の分割を提案した。それに対し、本稿のこれまでの考察においては、この案よりむしろ信念の動機に着目したほうが、説明がより容易になると同時にパラドクスも回避できる見込みがあることが確認できたと思う。しかし、現段階では、単に不合理性の説明においてMIが心の分割よりも幾分優位にあることが示せたに過ぎない。MIが不合理性の把握に本当に成功しているか、動機に依拠した説明がどこまで有効なのかに関しては課題もあり、今後の考察を待たなければならない。

注

1. デイヴィッドソンは「帰納推論のための全体証拠の要請 (the requirement of total evidence for inductive reasoning)」と呼ぶ (Davidson [1985], p. 140). 全体証拠の要請に背いた人は「保証の弱さ (weakness of warrant)」を抱えているとされる。
2. ラザールも心の分割が信念の全体論を脅かし、信念の同定を困難にするのではないかと危惧している (Lazar [1998], p. 32).
3. この問題に対処するには、自分の信念は自分がかもっともよく理解しているという「一人称権威」を認めるか否かについて考察する必要があるが、本稿では、信念の不合理性は、とりえず第三者の視点から指摘可能なものでなければならぬという姿勢で臨むことにする。
4. 金杉 [2003] は、この問題についてのひとつの解答と見なすことができる。金杉によれば、合理性は「内的整合性の要請」のみならず、「真理性の要請」など複数の原則や要請による「支えあい構造」であり、たとえある信念が内的不整合の要請に違反することにより不合理とされたとしても、その他の原則および要請を満たすことによってその信念を理解不可能性から救うことができ、不合理性のパラドクスを回避できる見込みがあるという。しかし、内的不整合の要請以外の原則や要請について、解釈者たる我々が認めるものと、被解釈者のそれとが食い違う余地が残るならば、やはり解釈主義による不合理性のパラドクスからの脱却は困難であると言わざるを得ない。
5. この論点は本稿の匿名の査読者により示唆を受けたものである。この指摘のおかげで、あたかも動機そのものが理由となるかのような誤解 (初稿はこの誤解に基づいて考察を進めていた) を免れることができた点に関して、査読者に感謝したい。

参考文献

- Davidson, D. [1982], "Paradoxes of Irrationality", in R. Wollheim and J. Hopkins (eds.), *Philosophical Essays on Freud*, Cambridge University Press, pp. 289-305.
- [1985], "Deception and Division", in E. LePore and B. McLaughlin (eds.), *Actions and Events: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, Basil Blackwell, pp. 138-48.
- [1998], "Who Is Fooled?", in Dupuy [1998], pp. 1-18.
- Dupuy, J. P. (ed.) [1998], *Self-Deception and Paradoxes of Irrationality*, CSLI

不合理な信念はいかにして説明されるか？

Publication.

- Gozzano, S. [1999], "Davidson on Rationality and Irrationality", in M. De Caro (ed.), *Interpretations and Causes: New Perspectives on Donald Davidson's Philosophy*, Synthese Library 285, Kluwer Academic Publishers, pp. 137-49.
- Heil, J. [1989], "Minds Divided", *Mind* 98, pp. 571-83.
- 金杉武司 [2003], 「解釈主義と不合理性」, 『科学哲学』 36 卷 1 号, 43-55 頁.
- Lazar, A. [1998], "Division and Deception: Davidson on Being Self-Deceived", in Dupuy [1998], pp. 19-35.
- Mele, A. [1987], *Irrationality: An Essay on Akrasia, Self-Deception and Self-Control*, Oxford University Press.

(お茶の水女子大学)